

乙 貞

第101号 通巻18巻第4号
1998年12月1日 発行

守山市立埋蔵文化財センター
電話・FAX 077-585-4397

〒524-0212
守山市服部町2250番地

新たに弥生時代の集落を発見

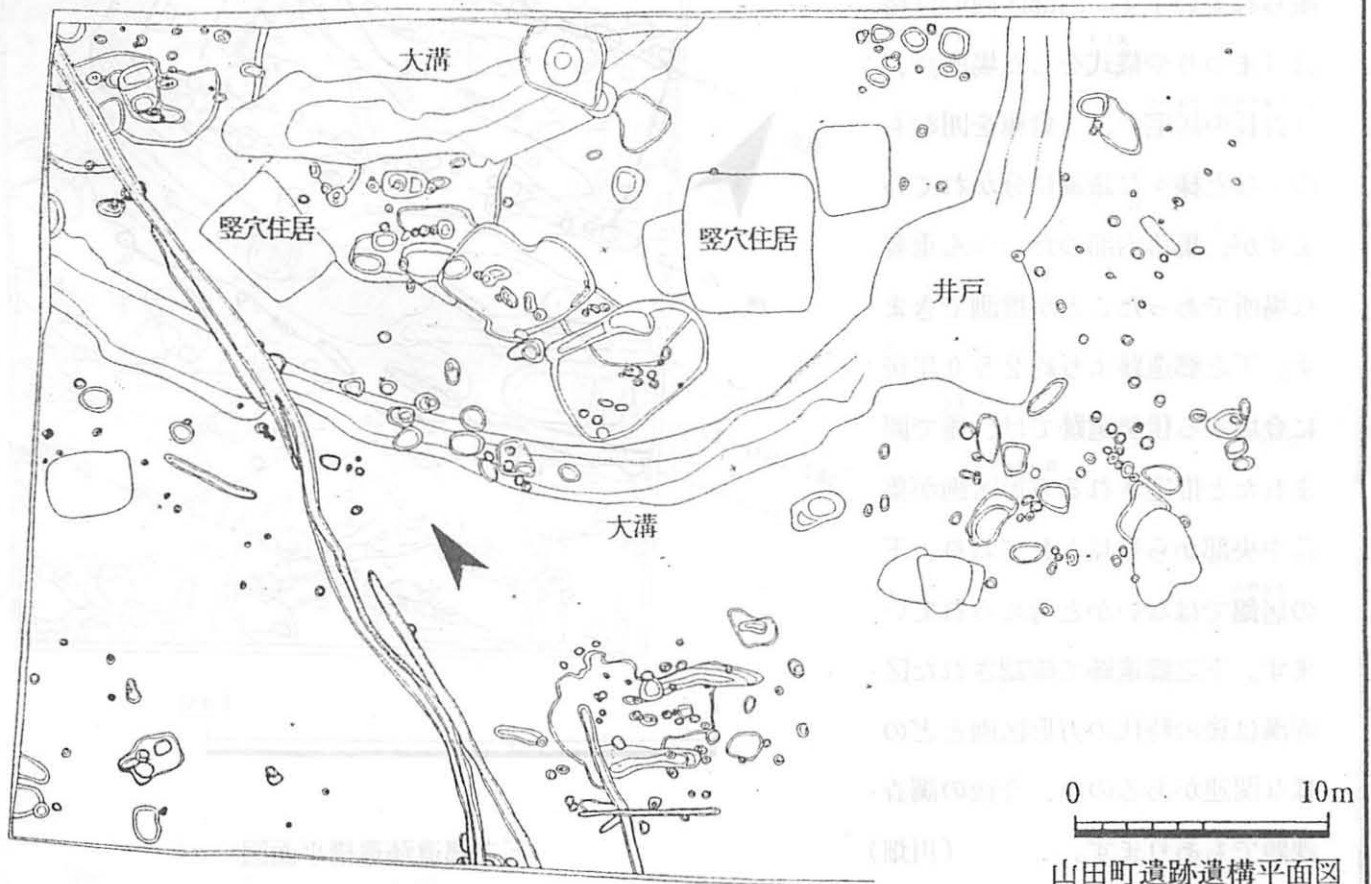
1. 山田町遺跡1次調査(勝部町)

山田町遺跡は市立守山女子高等学校の南隣で新しく発見された遺跡です。8月から実施してきた発掘調査によって、遺跡が弥生時代中期末頃(約2000年前)のムラの跡であることがわかってきました。これまでに見つかった遺構は、**竪穴住居**6棟、**大溝**2条、**井戸**3基をはじめ、たくさんの**ピット**や**土坑**などがあり、大量の弥生土器や石斧、石鍬(やじり)、砥石などの石器が出土しています。

この周辺では、過去に弥生時代中期の**方形周溝墓**が数カ所で見つっていますが、集落の存在はわかっていませんでした。今回、新たに弥生時代中期末の集落が検出されたことは、隣接する伊勢遺跡の成立の問題を考えるうえでもたいへん興味深く、この地域の歴史を解明する貴重な資料を追加したといえるでしょう。

発掘調査は来年1月末まで継続する予定です。

(小島)

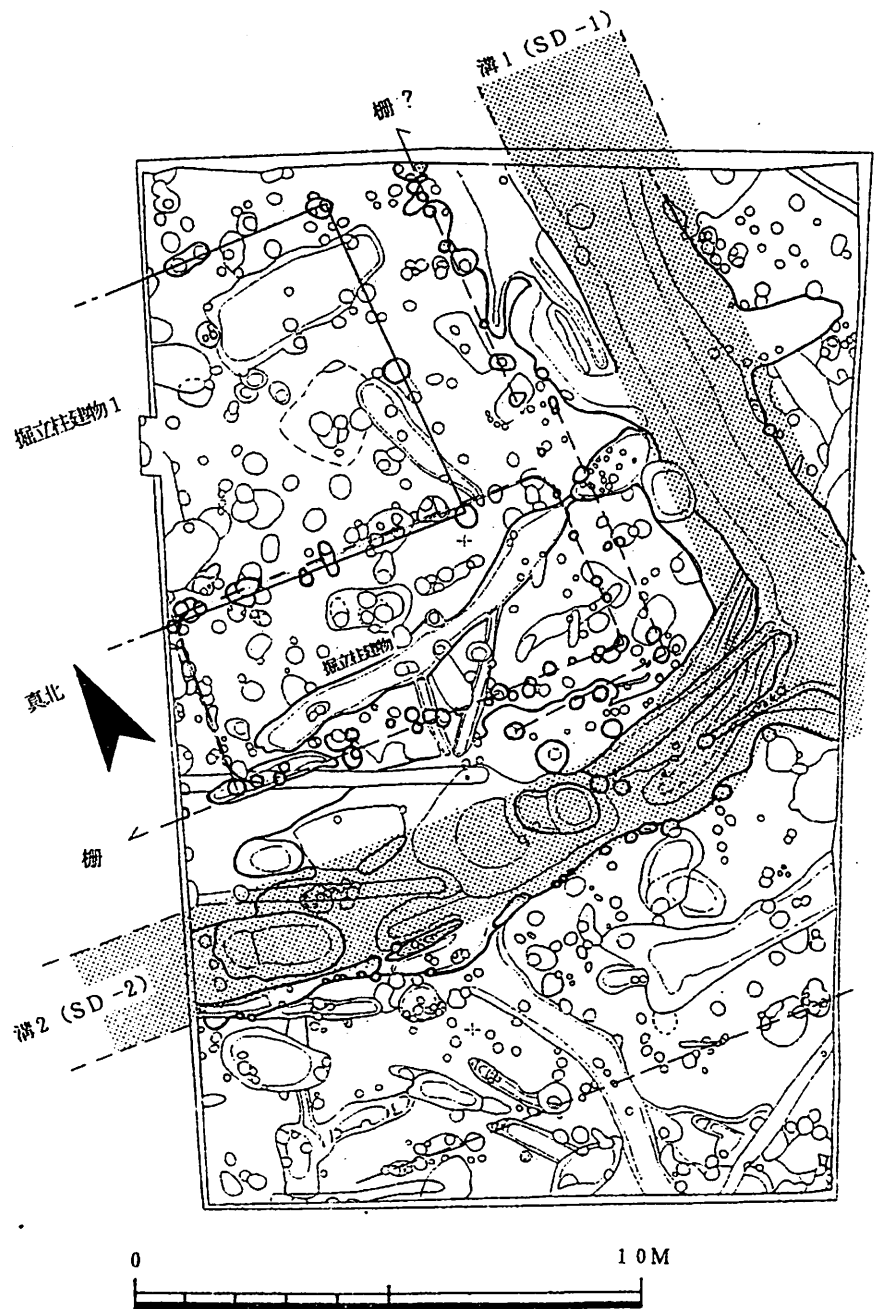


環濠集落の内部を区画する溝を発見

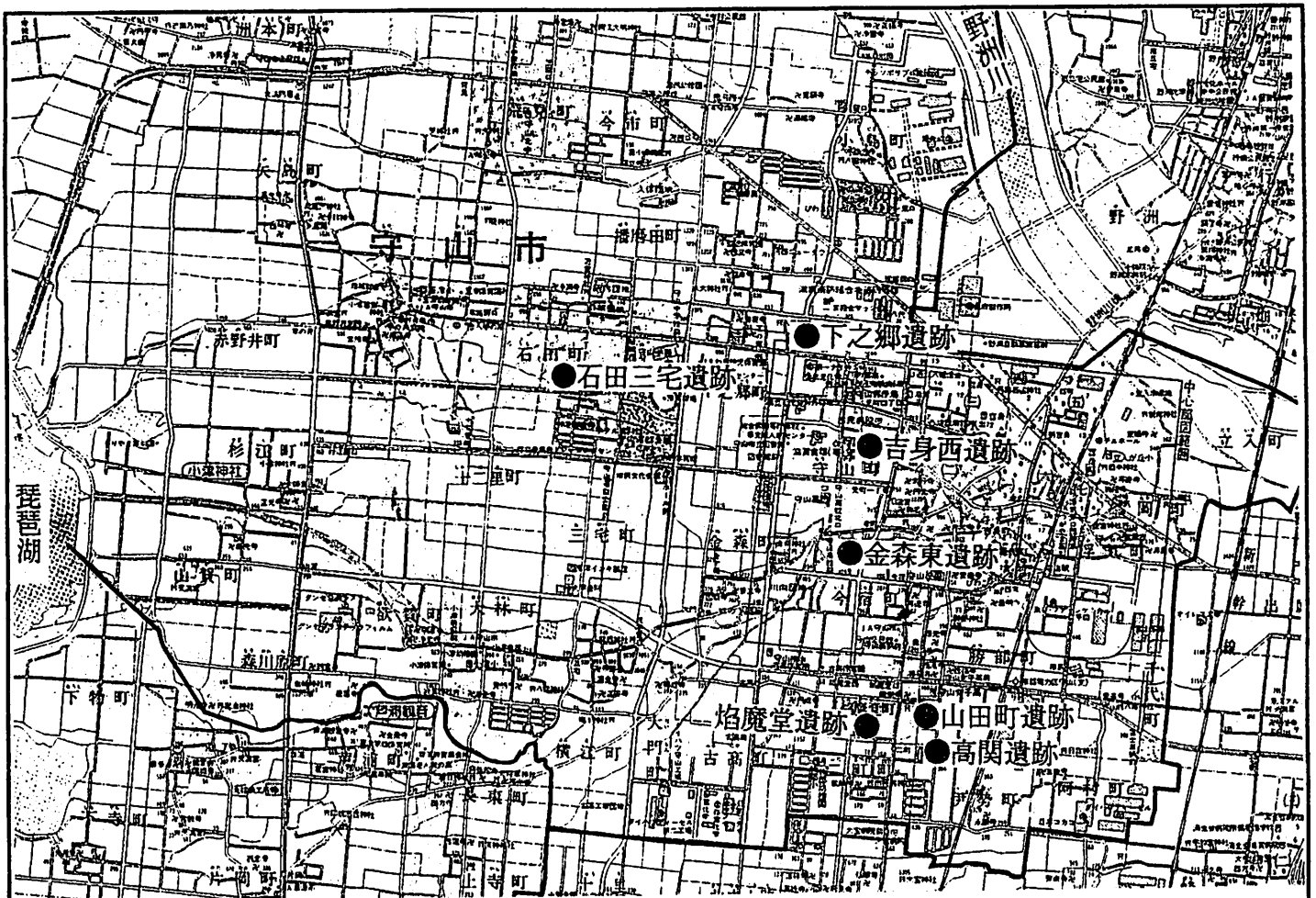
2. 下之郷遺跡第27次調査（下之郷町）

都市計画道路建設に伴う下之郷遺跡の調査では、ムラの中心部分と考えられる場所から内部を区画すると見られる溝（区画溝）が発見されました。区画溝は幅約 2.5m、深さ 0.6mの規模の南北方向と東西方向の溝がT字状に掘り込まれていて、集落内部の重要な場所を区画していたと考えられます。また、区画溝の内側からは無数の柱穴が検出され、建物が何度も建て替えられたことがうかがえます。

弥生時代の環濠集落の内部から区画が発見される例は珍しく、佐賀県吉野ヶ里遺跡や兵庫県加茂遺跡、大阪府池上・曽根遺跡などクニの中心集落と考えられる遺跡に限られています。内部区画の性格は「まつりや儀式をした場所」、「首長の居宅」、「倉庫を囲むもの」など様々な議論に分かれています。下之郷遺跡より約250年後に登場する伊勢遺跡では、柵で囲まれたと推定される方形区画が集落中央部から発見されており、王の居館ではないかと考えられています。下之郷遺跡で確認された区画溝は後の時代の方形区画とどのような関連があるのか、今後の調査課題でもあります。（川畑）



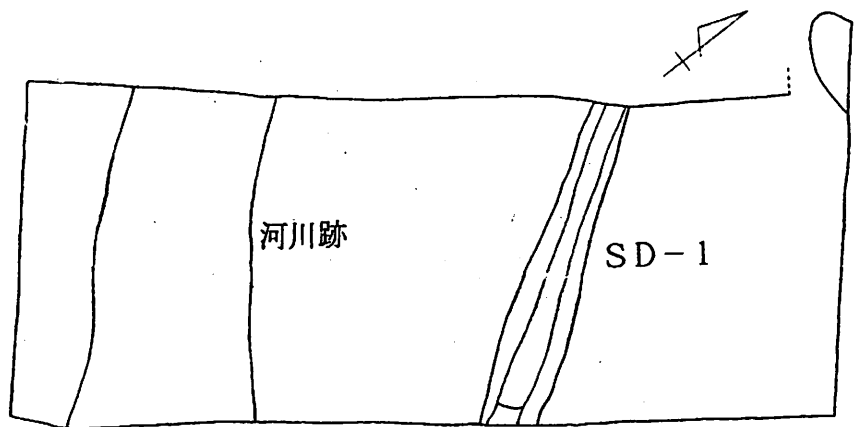
下之郷遺跡遺構平面図



発掘調査位置図

3. 吉身西遺跡87次調査 (守山町)

共同住宅建築に先立ち、約 200㎡を調査しました。その結果、弥生時代後期の壺が出土した溝 (SD-1) とビニールやプラスチックが埋まった河川跡が検出されました。後者は、現在調査地近くを流れる目田川の旧河川だと考えられます。 (大岡)



吉身西遺跡遺構平面図



4. 高関遺跡の調査 (二町町)

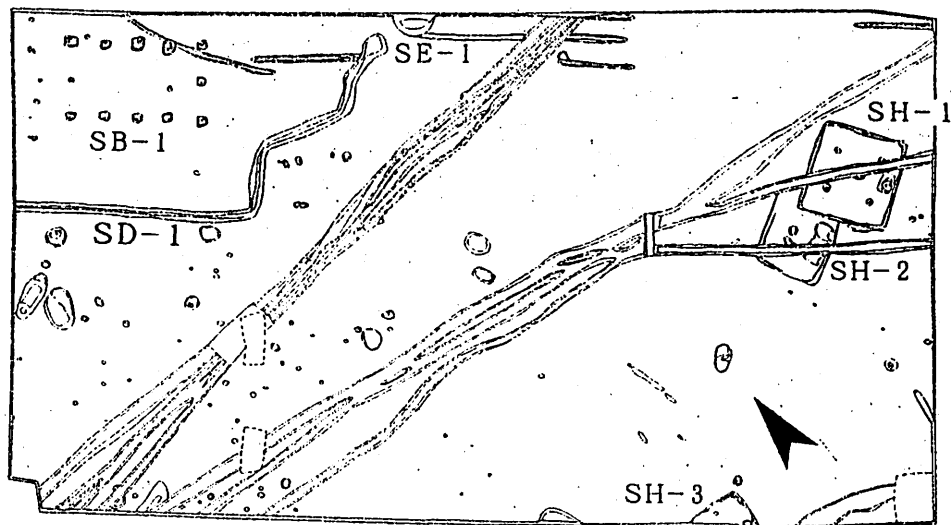
9月中旬から中山道の東側で、宅地造成工事に伴う発掘調査を実施しました。約 1,300㎡の調査地内から竪穴住居、掘立柱建物、井戸、土坑、溝、ピットを検出しました。

竪穴住居は3棟のうち2棟が建て替えのためか、重なって検出されました。このうちSH-1は一辺が約5mの規模で、埋土の中に多量の焼土の塊と炭が含まれていました。住居の床の土は所々が赤く焼けて、固くしまっており、そのすぐ上には炭が一面に広がっていました。さらに、西側の壁も赤く焼け

ていたことから、火災で焼失した^{しょうしつ}竪穴住居ではないかと考えられます。この住居の屋内には、屋根を支える^{しちゅう}主柱の穴が4個しっかり残っており、壁際に^{しゅうへきこう}周壁溝、住居中央には^ろ炉、南辺側に^{どこう}土坑が設けられていました。出土遺物は^{ちようけいつば}長頸壺や^{かめ}甕、^{といし}砥石などがあり、これらから住居の年代は弥生時代後期と考えられます。

掘立柱建物（SB-1）は調査区の北端で検出しました。建物の規模は4間（約7m）×2間（4.1m）で、土地の地割りと同じ方向に建てられています。この建物と平行に走る溝（SD-1）は途中で北東に折れ曲がり、蛇行した後、井戸（SE-1）の手前で止まっています。おそらく、この溝は建物を区画し、井戸から汲み上げた水を流す機能を持っていたと考えられます。また、井戸は^{ほりかた}掘方の直径が約4.2mの規模で、検出面から約1.5m下で井戸枠が見つかりました。枠には板材を用い、約1.7mの大きさで^{いげたじょう}四角い井桁状に組み、3mの深さまで6段組みにしていました。これらの遺構からは、須恵器の^{つきみ}杯身、^{つぎふた}杯蓋、土師器皿などが出土しており、8世紀中頃から後半の年代が考えられます。

（畑本）



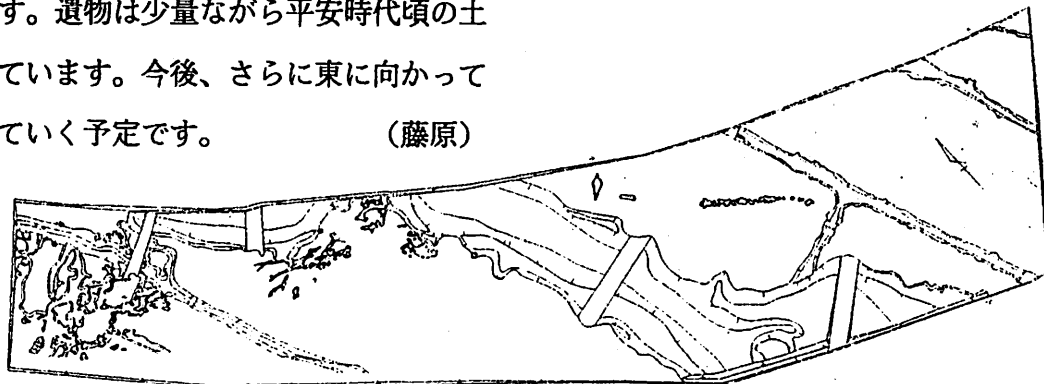
高関遺跡遺構平面図



5. 石田三宅遺跡の調査（石田町）

9月中旬から、東側のトレンチの調査を始めています。ここでも南北方向に流れる川跡や溝跡が見つかっています。遺物は少量ながら平安時代頃の土器が出土しています。今後、さらに東に向かって調査を進めていく予定です。

（藤原）



石田三宅遺跡遺構平面図



6. ^{かねがもりひがし}金森東遺跡12次調査（金森町字小瀬ヶ町・太田・大將軍）

平成8年度から、県立守山高等学校の南東側で、土地区画整理事業に伴い実施していた発掘調査も9月をもって終了しました。以下、時代別に調査成果の概要をまとめます。

縄文時代

今回の調査では縄文時代に該当する遺構は確認できませんでしたが、^{あやすざじょう せんこく}彩杉状の線刻を施した^{せきとう}石刀の出土が注目されます。石刀は縄文時代後期から晩期にかけて使用された石器で、儀式に使う道具とする考えもあります。金森東遺跡で出土した石刀は、後に古墳時代の溝に流れ込んで埋まったものと考えられますが、これまで弥生時代～平安時代の複合遺跡と言われていた当遺跡に、新たに縄文時代集落の存在を予想させる成果をもたらしたといえるでしょう。

弥生時代～古墳時代

12次調査で最も多く検出された遺構は、弥生時代後期から古墳時代にかけての竪穴住居と掘立柱建物です。これにより、弥生時代後期から古墳時代の集落がさらに南東側に広がり、その盛期が古墳時代中期にあることがわかりました。また、弥生時代後期には比較的広い範囲に竪穴住居が点在していたのが、古墳時代に入ると次第に狭い範囲に密集するとともに、住居の床面積も縮小していく傾向にあることもわかりました。過去に行われた周辺の調査と合わせると、検出した竪穴住居の総数は110棟を越えます。今後、各住居の時期を綿密に検討していくことにより、同時期に併存した住居の実数など、集落内の様相が一層明確になると思われます。

なお、以前から金森東遺跡内における玉作りの可能性が指摘されていましたが、残念ながら今回の調査では^{こうぼう}工房跡は検出されませんでした。しかし、竪穴住居の埋土から^{かつせき りょくしよくぎょうかいがん}滑石と緑色凝灰岩のチップが多量に出土していることから、集落内で玉作りが行われていた可能性は高いと考えられます。

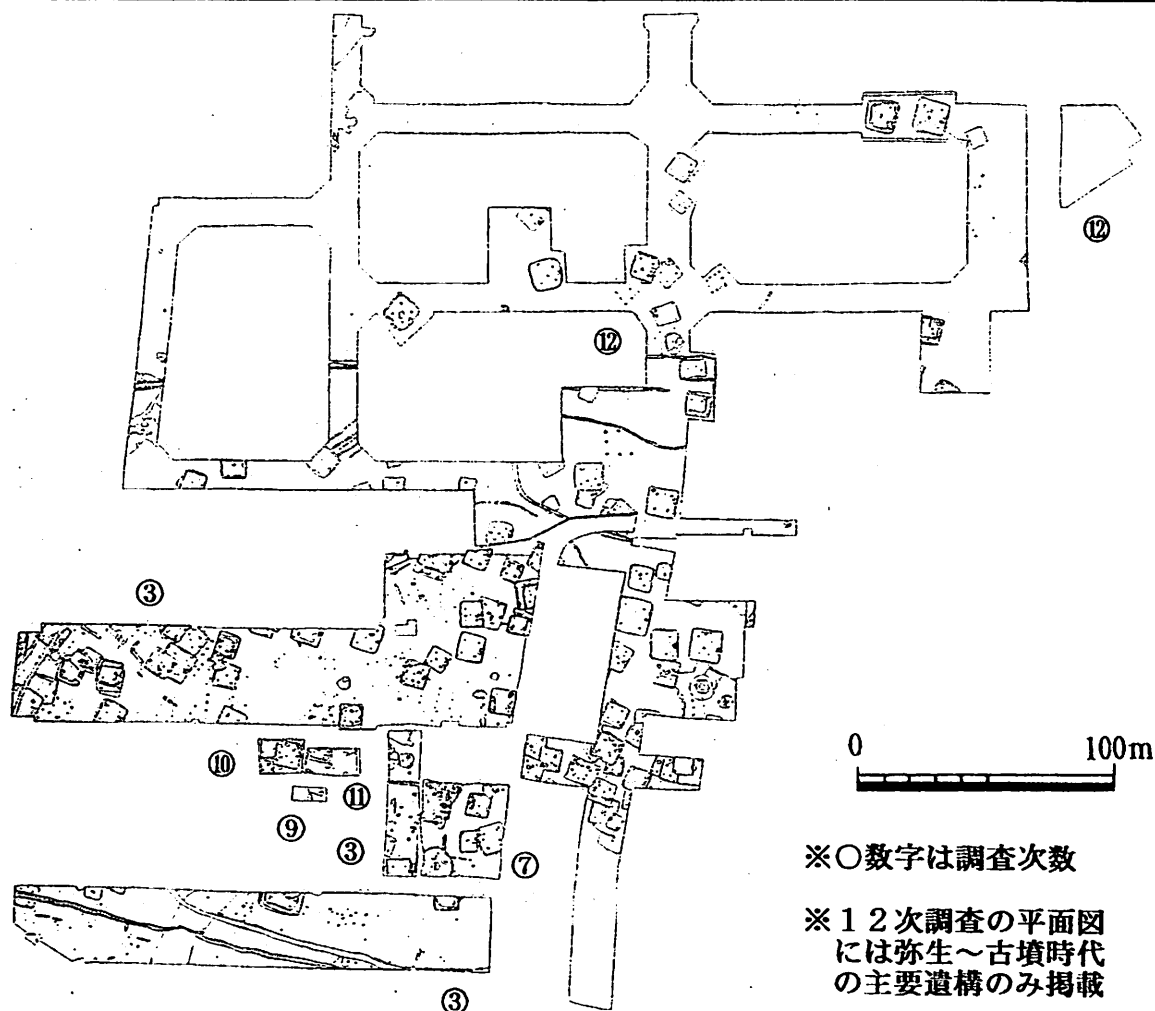
飛鳥・奈良時代以降

飛鳥・奈良時代以降の遺構密度は全体に希薄ですが、大型の掘立柱建物（8間×2間以上）1棟と平安時代の土師器・黒色土器・須恵器などの土器が大量に出土した大溝が注目されます。大溝は建物から約30m南東に位置しており、建物の長軸と平行しています。さらに、調査区の端で直角に曲がるとみられ、建物を囲むように巡らされている可能性も考えられます。いずれにしても建物と大溝の関係については今後の調査によるところが大きいでしょう。



石 刀

（小出）



※○数字は調査回数

※12次調査の平面図には弥生～古墳時代の主要遺構のみ掲載

金森東遺跡検出遺構平面図

7. 焰魔堂遺跡の調査 (焰魔堂町)

宅地造成工事に伴い、4月から約3,600㎡を対象に実施していた発掘調査も11月で終了しました。今回の調査では、弥生時代後期の竪穴住居や方形周溝墓群を検出するなど、大きな成果をあげることができました。次号では調査成果のまとめを報告したいと思います。

(中村)

【埋蔵文化財センター歴史入門講座のお知らせ】

市立埋蔵文化財センターでは下記のとおり歴史入門講座を開催します。第6回は「中世の遺跡調査」というテーマで、市内から見つかっている鎌倉・室町時代の集落遺跡の調査を中心にした話を予定しています。なお、今年度の最終講座となります。詳しいお問い合わせは市立埋蔵文化財センターまで。

(☎585-4397 有線(速)38112)

☆ 日程および講座内容 ~全体テーマ 『遺跡から何がわかるか』 ☆

第6回 12月19日(土) 午前10時~12時 「中世の遺跡調査」